



ヨーロッパの念仏者

徳 永 一 道 (とくなが いちどう)

一

宗門の海外開教といっても、日本からの移民を対象として始まったハワイやアメリカ・カナダおよびブラジルなどに比べると、ヨーロッパ開教はまったくそのおもむきを異にする。日系人のように儀礼や習俗を通して浄土真宗にふれるということはまったくなく、^か彼の地の人たちは純粹に教義のみを通して浄土真宗にふれたのだから、驚くべきことではないか。それはまず『歎異抄』のドイツ語訳として伝わったらしい。有名なドイツの神学者カール・バルトが『歎異抄』にあらわれた宗祖の救済思想について言及しているから、これは間違いのない事実であるといえよう。

さて、現在では、ヨーロッパの念仏者が二年に一度集まって教えを学び、かつ語り合う欧州真宗会議^{もよお}という催しがある。今年の八月下旬にドイツのデュッセルドルフにある恵光寺^{えこうじ}で開催されたのが第十四回であったから、すでに三十年近い歴史をもつことになる。規模は小さくてもすでに定着しているといえよう。

ところで、ヨーロッパ各地に念仏者のグループが生まれたのは、昭和二十八年だったかに今は亡き前門様がベルリンでハリー・ピーパーという人物にお会いになったことに端を発する。ピーパー師はすでにドイツ語訳の『歎異抄』によって宗祖の教えに心酔^{しんすい}しており、それを認められた前門様はピーパー師をヨーロッパの最初の真宗門徒とされたのである。以後、浄土真宗の法義はこのピーパー師を通じてイギリス・ベルギー・オーストラリア・スイスへと伝えられた。

毎回かならず欧州真宗会議に出向された前門様に随行したことが何度かあるが、そのご様子からヨーロッパの念仏者たちをどれほど大切に思われているかがありありと伺^{うかが}われた。また「数は少なくとも、この人たちは宝石のように尊^{とうと}い人たちだ」という意味のことを口にされたことも憶^{おぼ}えている。それはひとえに、先にも述べたように、彼らが純粹に法義^ひのみに惹かれて念仏者となったからに違いなかった。

二

奥深い浄土真宗の法義が欧米人に理解できるはずがない、と思いついでいる人が現在もまだ数多く存在することには驚かされる。私が米国の大学で宗祖の浄土教思想を講義して帰国したとき、よく出されたのは「アメリカ人に仏教や真宗の教えがわかるんですか？」という問いであった。そういう時には必ず「あなたにはわかるんですか？」と皮肉たっぷりに問い返すことにしていた。私の経験から言えば、浄土真宗の法義について語る場合、少なくとも日本の大学生やいわゆる知識人に対してよりは、ヨーロッパの念仏者に対しての方が、ずっと楽だということである。

浄土真宗の法義の中で、現在もっとも誤解を招きやすく、したがってそれを口にすることさえ躊躇^{ちゅうちよ}される「他力本願^{たりにほんがん}」や「悪人正機^{あくにんしょうき}」という概念も、ヨーロッパでは堂々と口にすることができるし、また理解も早くか

つ深い。むしろ彼らはこういう法義に惹かれて念仏者になったと言ってもよいほどなのである。

ある時、宗祖の「信心」は弥陀の^{みだ だいひ}大悲に自らのすべてを「ゆだねる」ことだという話をしていたら、ドイツ人の女性から「なぜ信じることがゆだねることなのか？」と訊かれたことがある。答につまった私は、彼女が抱いているマリアという赤ちゃんがスヤスヤと眠っていることに気がついて、何気なく「マリアに訊いてみたら？」と言ったら、彼女は^{しぐさ}その仕草と表情で、私が言ったことを十分に理解したことを示した。マリアが何の心配もなく眠っていられるのは、母親である彼女の胸に抱かれていたからである。それが彼女が母親を「信じる」姿であった。弥陀を「信じる」ことを宗祖が^{たの}「憑む」すなわち「ゆだねる」ことと同義だとされたのは、われわれがすでに^{せつしゅ こうみょう}弥陀の撰取の光明の中にあるからである。このことをそのドイツ人女性は完全に理解したのである。

三

このように浄土真宗法義の^{かなめ}要である他力の信心が、ヨーロッパの念仏者によって十分に理解されうることに思いをいたすとき、われわれはこの法義を彼の地に伝えることを躊躇すべきではない。それは、宗祖がその生涯をかけて明らかにされたのは、人間である限りそれを受け入れざるをえない究極的な真実だからである。

ヨーロッパにはこの法義が育つための十分な土壌があるのだが、それにしては^{だいおんき}今度の^{だいおんき}大遠忌に向けてヨーロッパを念頭においた計画が一つとして見られないのは、淋しすぎるのではないか。まして、このたびの『^{しょうそく}ご消息』が、ひとり宗門内部の人たちのみ、あるいは日本人のみを念頭においてのものではなく、ひろく人類ひいてはこの地球上に存在する衆生というレベルで書かれていることに思いを致すとき、ますますこのことが痛感されるのである。

(勸学・京都女子大学教授)